

# あ い さ つ

東京都中学校理科教育研究会会長  
第50回全中理東京大会運営委員長

中 村 日出夫

全国中学校理科教育研究会が発足して半世紀に、第50回全中理東京大会が東京都文京区で開催されることは誠に記念すべきことでもあります。東京都中学校理科教育研究会（都中理）では、この大会を従来の伝統や慣習を大切に、更に新しい時代の研究大会となるよう様々なアイデアを盛り込んで準備を進めてきました。その一方で、都中理としての研究実践の特色をまとめようと企画したものが本誌の編集・発行でした。そこには、昭和29年10月に本都で第1回の全国大会が開かれて以来、50年の周年を彩る記念誌をまとめようという会員共通の思いがありました。

都中理は、全中理発足の昭和28年以前から活動していますが、残念ながらその発足の経緯は詳細にされていません。昭和40年発行の都中理研究会誌10号に「かつて昭和24年から会報が出されたが…」という記述があることから、「本研究会が昭和24年以前に発足したことだけは明らかである」と元都中理会長林郁治朗氏は述べています。東京での全国大会開催は、大会誌沿革史抄にもあるように、第1回、第10回、第20回、第23回、第30回、第40回と今回の第50回の7回を数えます。また、関東甲信越地区大会は、昭和38年の第3回をはじめ第6回、第11回、第16回と今回の第23回の5回が東京開催となっています。

都中理は現在、都内公立中学校理科教員約2千名余りの会員を有し、平成10年に告示された学習指導要領の諸課題に、先進的な研究と実践を行ってきました。特に、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現の状況を見る評価（いわゆる絶対評価）については、評価規準の作成と実践、学習指導の改善等を精力的に行い、数々の成果をあげています。都中理は、総務部、研究部（会員研究発表会（11月下旬）、生徒研究発表会（1月上旬）、編集部（都中理研究会誌発行、新しい理科の指導資料集編集発行）、調査部（会員名簿発行）、会計部の5部と、教育課程、学習指導、観察実験、環境教育、学習評価、インターネットの6委員会が各地区より選出された延べ100名以上にも達する委員を中心に研究・研修活動を行っています。それら各部・各委員会の事業計画等は、毎月の役員会と隔月に開かれる各地より選出された52名からなる代表理事会で話し合わせ、情報の共有化と事業の活性化を図っています。

これらの都中理独自の事業の他にも本会会員の活動や研修の場があります。例年のものとしては、東京都教育委員会の教育研究員・東京の教育21研究開発委員・教育課程委員・教員研究生などの制度があり、本誌に掲載した論文は、それら近年の研究成果の中から抜粋したもの他、理科及び産業教育審議会委員・日本理科教育協会「理科」編集委員・日本学生科学賞審査委員・発明工夫展審査委員・サイエンスグランプリ審査委員・教育課程状況調査問題作成委員・同分析委員・評価規準作成委員・同解説書作成編集委員など、多岐に渡っています。

会員の研究には本誌に記載された以外にも多くの実践や研究があることも見逃せませんが、本誌が理科教育と会員諸氏の更なる進歩・発展のために資する事ができれば幸いです。

# 「東京の理科研究」発刊にあたって

全国中学校理科教育研究会会長  
東京都中学校理科教育研究会前会長

田 中 信 一 郎

第50回全国中学校理科教育研究会東京大会を記念し、ここに「東京の理科研究」が発刊されることは、理科教育にとって大変意義深いことだと思います。

さて全国中学校理科教育研究会（全中理）の歴史を振り返ってみますと、今後の日本の発展に理科教育の重要性から昭和28年8月「理科教育振興法」が制定されました。この時に、全国理科教育推進委員会副会長より中学校理科担当教員の全国的な研究組織を結成することが勧められ、推進委員会の中学部会で行うことになりました。10月2日に全国代表者会議を開催し、翌3日「全国中学校理科教育協議会」が結成されました。会長に東京大学の茅誠司博士をお願いし、翌年の昭和29年に第1回全国大会を東京上野の国立博物館で開催されました。以来、今年で50回、半世紀にも及ぶわけですが、その間理科教育は大きく変わってまいりました。理科教育振興法が成立した当時は、日本が貧く、世界に先駆け優れたもの、世界に負けない良いものを作る、そのためには理科教育が大切であると誰もが考えたわけです。1957年(昭和32年)ソ連の人工衛星スプートニクの成功から世界をあげて科学技術の競争となりました。アメリカを中心に理科教育の現代化が進められたのもこの頃です。日本では、戦後の生活理科から、基礎学力の低下が言われ、系統的な学習を進めていた時期でした。ブルーナーの「教育の過程」などが読まれ、日本の現代化が進められたのは1970年代に入ってからです。教科書も解答のない実験方法しか載せてないものが多くでてきました。しかし現代化カリキュラムは、子供の負担が重くなりすぎ「落ちこぼれ」の問題を生み出しました。高度経済成長期を過ぎると、社会の要求は物質的充実から精神的充実へと移り、ゆとりある学校生活の中で人間性豊かな児童生徒を育てることが重視され、大幅に理科の時間も減りました。さらに1989年の学習指導要領の改訂では、小学校の1, 2年生に生活科が生まれると同時に、中学校では個に応じた教育の重視の視点から選択教科が生まれました。そして現在は、「生きる力」を育てる視点から一層の選択教科の重視と、総合的な学習が行われています。理科の時間はさらに減少したわけです。

このような理科教育の変遷の中でも、教師の指導の工夫と努力によりIEA(国際教育到達度評価学会)の学力調査によると1970年の第1回では、27カ国中1位、1981年の第2回では、17カ国中2位、1995年の第3回では、46カ国中第3位と常に上位を占めています。中身を細かく検討すると色々課題がありますが、日本の理科教師の質の高さを示すといつても良いでしょう。

このたび東京の理科の教師による日頃の教育実践、教材研究の成果をこの冊子にまとめられたことは大変意義深いことであり、後世に伝える大切な宝物であります。是非今後の授業にもこの資料を生かしていただき科学を愛する生徒を多数育てて欲しいものです。

終わりにになりましたが、「東京の理科研究」の編集にご尽力いただきました、研究部の添田禮子先生、蛭田明先生以下研究部の先生方に心から感謝申し上げます。